

---

# 放浪のフルカス～商売の法則～

翠川剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

放浪のフルカス〜商売の法則〜

### 【Nコード】

N7363B

### 【作者名】

翠川剣

### 【あらすじ】

交易都市オリアスは、大陸の東と西を繋ぐ砂漠の道【オフアニム街道】の間にある都市である。

交易都市オリアスは、大陸の東と西を繋ぐ砂漠の道  
【オファニム街道】の間にある都市である。

オリアスは、街道を行き来する様々な人々のおかげで、  
世界一の貿易都市として栄えている。

オリアスは、長い砂漠の道の休憩地として 砂漠のど真ん中に  
作られた都市である。

オリアスは他の都市とは違い、通行許可書などの面倒な手続きが  
要らない。  
よって人々は自由に東西を行き来でき、自由に商売が出来るため商  
人の都市としても知られているため、人々の出入りは昼夜を問わず  
多い。

しかし、その制度のおかげで、大陸中から流れ者が集まる原因と  
もなっている。

今日では守備隊がいる地区の治安は安全だが、いない地区は無法  
地帯となっている。

オリアスでは、今年も先祖（この都市を作った技術者や商人など）  
に  
感謝する感謝祭が開かれており、先祖達の墓標の前で多くの商人  
が店を出していた。

この感謝祭の時期には、大陸中から多くの観光客が訪れる。

それは、世界中の商人が普段手に入らないような貴重な品や珍しい物を  
広場に出店しに来るからである。

しかし、誰でも出店できるわけではない。出店には金貨三十枚を  
税として  
都市に収めなくてはいけないのである。

だから、広場から外れた場所に無断で出店する商人は少ない  
のだ。

赤茶色の粘土で作られた四角形の建物の路地裏に、  
無断で店を出している商人がいた。

建物の隙間から差し込む光りによって、覗くことのできる商人の  
顔つきはまだ若い。

商人の腰につけられた黒革のホルスターには、  
丁寧に整備された回転式拳銃リボルバーが一丁。

まるで獅子の如く眠っており、獰猛にほえる時を静かに待ってい  
る。

大陸では軽火器・重火器といった武器は、  
古代人の残した遺跡  
から

入手することしかできない。そのため銃は宝石よりも貴重な存在である。

「フルカスの兄貴、なかなか客は来ないっスね。やはり場所が悪いんですかね？」

商人の隣に座る人形は、フルカスに尋ねる。

人形は茶色の髪に青い目で、迷彩柄の服を着ていた。

「商売とはそういうものだよ、クルソン。それにね、

この路地裏は隠れた名店が多いことで、裏の世界では有名なんだよ。

まあ、とにかく気長に待とうじゃないか」

フルカスは、のんびりとした口調で人形のクルソンに言った。

「気長ですか……持久戦になりそうっスね」

「そうかもしれないね。でも時間は無限にあるんだ。急ぐ必要はないさ」

フルカスは雲ひとつない空を見上げながら呟く。

太陽は南中に射しかかろうとしていた。

路地裏に老紳士と、大剣で武装した数人の男達がやって来た。

老紳士は、外見から判断して高貴な身分な者だろう。  
大剣で武装した男達は、おそらく守備隊の者だろう。

まるでタップステップでも踏んでいるかのように、  
軽快な音を出していた老紳士の焦げ茶色の革靴は、  
フルカスの店の前でその動きを止めた。

どうやら老紳士はこの店に立ち寄るようだ。

少しの間、風呂敷に置かれた商品を値踏みするように眺め回して  
いたが、

老紳士は商品の中から鈍色の懐中時計を手を取った。

白髪に威厳たっぷりの髭を伸ばした老紳士は、

目を輝かせながら懐中時計に魅入っていた。

「すまんがこれはいくらかね」

老紳士は尋ねる。

「特に値段はつけておりません」

フルカスは迷うことなく即答する。

老紳士はフルカスの返答に、困惑した様子で目を丸くしていた。

老紳士が生きてきた中で、値段のない店など見たことも聞いたこともなかったからだ。

「ではタダなのかね？」

老紳士は再び尋ねる。

「そうではありません。

私は鑑定士ではないのでこの時計の価値が分からないのです。ですから私の店では商品の価値の分かるお客様に妥当な値段をつけていただいて、

そのお客様が決めた値段で売っています」

老紳士は眉間をアルファベットのM字型にすると、周りの護衛達としばらく話し合った後、フルカスに提案してきた。

「私はアンティークコレクターであって鑑定士ではない。

よって妥当な値段などつけることはできません。

だから物々交換といこうではないか？

懐中時計と見合うかどうか分からないが、このナイフでどうかね？先程手に入れたばかりの珍品ではあるが、私にはあまり必要のないものだからな」

老紳士はナイフを、フルカスの前に差し出す。

フルカスはナイフを手にとった空にかざしてみる。

「これは珍しい。ナイフピistolですね」

「どうやら君はそのナイフの価値が分かったようだね」

老紳士はにやりと口元を緩めた。

「それでは交換と行きましようか」

フルカスはナイフピistolと懐中時計を交換した。

老紳士はとても嬉しそうに店をあとにした。

路地裏に白衣を着た中年の男がやって来た。

知的に満ちた眼鏡に、清潔を保った白衣と、自信に満ちた顔、手には何百何千も読んだと思われる革表紙の本、胸周りには国立の学者である証の、金のバッチが光っていた。

ポロポロの本を丁寧に持った学者がこの店に立ち寄るようだ。

少しの間商品を値踏みするように眺め回していたが、学者は風呂敷に乱雑に置かれた、商品の中から長方形の石版を手にとった。

学者はポケットに入れていた高倍率のルーペを取り出すと石盤に書かれている文字を食い入るように見ていた。

「この石版をどこで手に入れたのだね」  
学者は石版に興味津々と言った感じで尋ねてきた。

「たしか砂漠の遺跡群で見つけました。大変価値のあるものなので  
すか？」

「その通り、大変価値のあるものだ。君はこいつの価値を知らずに  
所持していたのかね？」

「そうですね、珍しい文字の書かれた石ころかと思っていましたよ」

「ただの石ころだと？これは数世紀前に滅びた伝説の国、ペヌエル帝国の古代兵器ありかを示す13の石版の一つで、今まで数々の考古学者が発見しようとしてできなかった最後の石版だぞ。」

それが君のような無知な商人の手にあるなんて……ああ勿体ない」

「そんなに価値があるものとは知りませんでした」

フルカスは学者の失礼な発言に苦笑しながら答える。

「それはそうだろう。うん、当たり前だ。」

えっと……値札がないようだが、金貨何枚で売ってくれるんだ？」

学者は尋ねる。

「特に値段はつけておりません」

フルカスは迷うことなく即答する。

学者は難解な古代文字を解読するときのように顔を曇らせた。

学者が生きてきた中で値段のない店など、見たことも聞いたこともなかったからだ。

「ではタダなのかね？」

学者は再び尋ねる。

「そうではありません。私はこの石版の価値が分からなかった。だから貴方が石版の値段を決めてください」

学者は両手を組んでしばらく考え込んだ後、フルカスに提案した。

「では金貨百枚で手を打ってくれないか？これ以上金を出す学者はいないと思うぞ」

「分かりました。金貨百枚で売りましょう」

フルカスが石版を学者に渡すと、

学者は石版を大事そうに持って足早に店をでて行った。

太陽は地平線の彼方に沈もうとしていた。

すっかり暗くなった路地裏からは、どこからか酔っ払いの鼻歌が聞こえた。

「フルカスの兄貴、そろそろ店を閉めないんですか？」

「うん。そろそろ店を閉めたいんだけどね。まだ彼が来てないからね」

フルカスは、月夜に照らされた路地裏に動く人影を見ながら言っ

た。

店の反対側の道から、若い男が歩いてくる。

男は黒のくたびれたジャケットに、色落ちの激しいジーンズ。無精髭を顎まで生やし、二つの眼を猛獣のように輝かせていた。

男はフルカス目の前で動きを止めた。

どつやら男には目的があるようだ。

男は一文字の口元を三日月に変形させると、ジャケットに隠し持っていた銀色の拳銃を抜いて、フルカスの額に標準を合わせる。

「この状況が分からないわけないよな？腰につけてるリボルバーを床におきな」

男はトリガーに手をかけながら言い放つ。  
フルカスはそんな男の脅しに屈することなく鷹の目の如くにらみ返す。

「俺が本気じゃないとも思っているのか？」

男はトリガーを引いた。

拳銃から鉛の弾が吐き出され、フルカスの右頬を掠めた。

フルカスの右頬から一筋の血が流れる。

「次は外さないぜ？だから銃を床に置きな」

「逆らわないほうがいいみたいですわね」

フルカスは腰につけてあったリボルバーを床に置いた。

「よし、それでいいぞ。……では次にあなたの全財産頂こうかね。正し、へたな真似をするなよ？」

男は不気味に笑いながら言った。

フルカスはローブのポケットから、全財産の入った布の子袋を取り出すと

男の足元に転がす。男は布の子袋を片手で拾うと、ポケットに手際よく入れた。

もう片方の手は拳銃はフルカスを狙ったままである。

「貴方の要求には全て応えました。だから僕を解放してください」

「それは出来ない相談だな。このままあなたを解放して、守備隊なんかに通報でもされたら厄介だしな」

男はにやりと笑う。

男のトリガーを引く手にためらいは感じられない。

これまで多くの人々を、その拳銃で殺害してきたのだろう。このままではフルカスは殺されてしまう。

「これは取引として不公平だ。あなたは僕から全財産を持っていく

のに、  
貴方は僕に何もくれない。  
だから僕もそれ相応の物を貴方からいただきます」

フルカスは右手に隠し持っていたナイフピストルのトリガーを引いた。

ナイフピストルの弾は、男の胸の筋肉を乱暴に切り裂き、骨を砕き、心臓を貫通した。

男は予想外の出来事にうまく対処できずに、その場に膝から崩れ落ちた。

煉瓦で舗装された道路を、少しエンジンを改良してある白いバギーが走っていた。

道路は凸凹していて、バギーは進むたびに大きく揺れる。

「あのままでいいんですかフルカスの兄貴？」

クルソンは、納得がいかないという表情でフルカスに文句を言う。

「いいんだよ、クルソン。商売とはプラスもマイナスもあっちゃいけないんだ。」

それに僕の旅に必要なのは彼から貰ったよ」

フルカスは空になった子袋と、銀色の拳銃をポケットをクルソ  
ンに見せて笑う。

フルカスがオリアスを旅立って三日後、守備隊が金貨にまみれた若  
い男の死体を見つけた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7363b/>

---

放浪のフルカス～商売の法則～

2010年12月14日22時05分発行